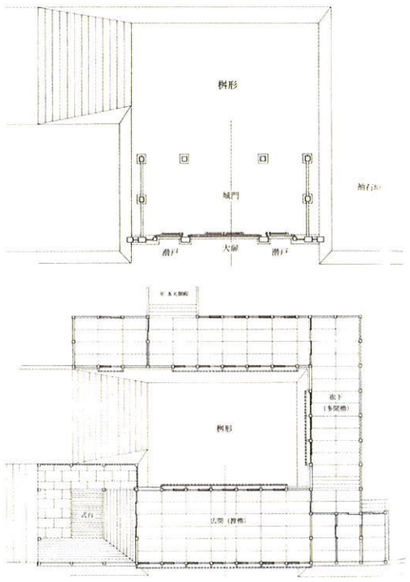
構を確認しました（写真６）。

櫓門は通常、梁間（奥行き）２間なので、切手門跡の礎石は下＜参考＞図のように礎石が直線上に３石並びます。ところが切手門ではその奥にさらに１つ礎石が見つかっており、南北ともに梁間３間となる珍しい形式の門であったようです。

切手門の櫓台部分の調査では、天端面の表土を除去しましたが、礎石配置は明確でなく、櫓台中央部で礎石を１箇所確認する事ができました。また、櫓台東側では雨落溝と思われる溝を発見し、その溝の中に豊島石製のＵ字溝をが据えられている事を確認しました。さらにこの溝はＬ字状に東へ続き、切手門櫓部分と接続して建てられていた多門櫓である「弓櫓」の雨落溝と連続していることもわかりました（写真７）。

切手門の内側には本丸へと続く雁木（石段）がありますが、現在の物はその下半分を歩きやすいように傾斜を緩やかに改変していました。本来の雁木は現在のものよりも 70 ～ 80cm 下に埋まっていました。これは明治時代に切手門を撤去した跡に改変されたようで、本来の雁木は破壊された切手門の部材（瓦・壁土など）で厚く覆われていました。

＜参考＞



津山城表鉄門復元平面図

文献
三浦正幸 1999「城の鑑賞基礎知識」至文堂

写真６　雨水集水舛状遺構（西から）

まとめと今後の展望

今回の調査で、天守台周辺の江戸時代の生活面の高さを確認することができ、整備工事の基準面とすることができました。さらに天守台の基礎構造もある程度明らかにすることができました。また、埋没石垣についても新たな資料が得られました。

切手門については、その構造に不明な部分が多いため、次年度以降も追加の調査を実施し、その実態に迫っていく予定です。

なお、切手門跡は史跡津山城跡保存整備事業の中で整備対象となっているので、確認できた礎石は埋め戻すのでなく、なるべく露出して見学できる状態にしておくことを検討しています。

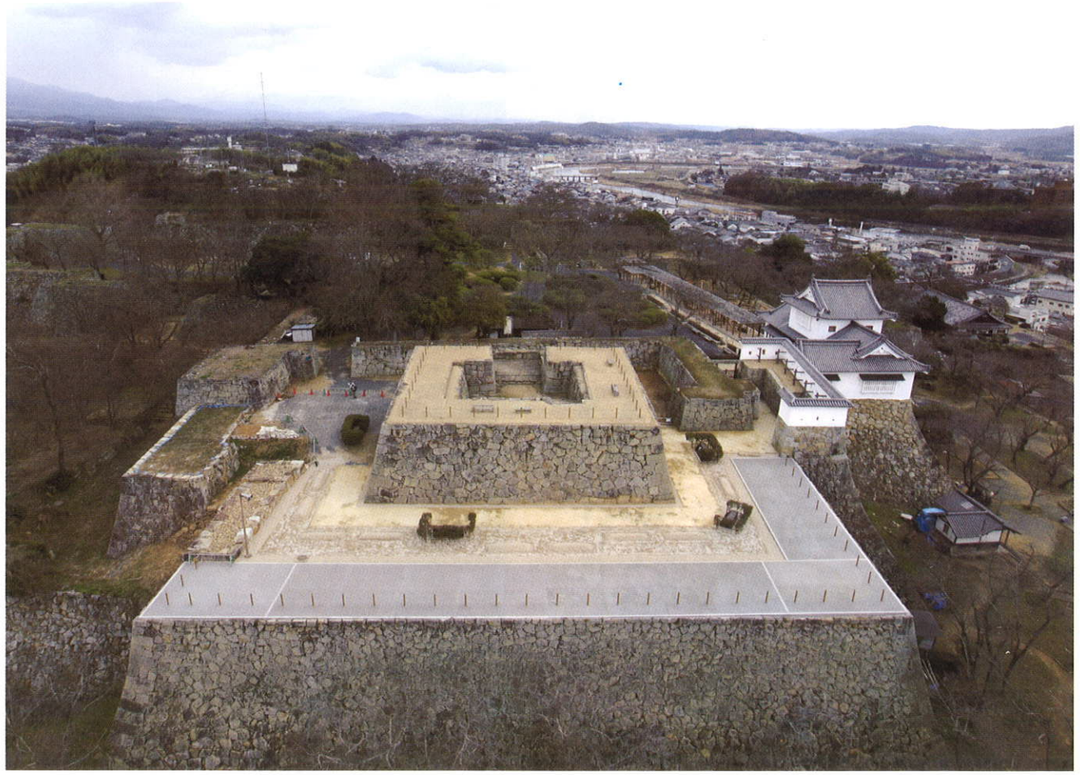
写真７　櫓台部分雨落溝（南から）

津山城だより No.13 2009年3月
TSUYAMAJODAYORI
津山市教育委員会 文化財課

発行年月日　平成 21 年 3 月 31 日
編集・発行　津山市教育委員会
文化財課
〒 708-0824 岡山県津山市沼 600-1
ＴＥＬ　(0868) 24 － 8413
印　　刷　中央印刷

津山城だより No.13 2009年3月
TSUYAMAJODAYORI
津山市教育委員会
文化財課

天守曲輪西半整備が完了しました



整備が完了した天守曲輪西半（西側上空から）

平成 18 年度から継続してきた天守曲輪西半整備がほぼ完了しました。

整備は南面の３間×８間半の多門櫓・南西隅の３間×４間の二重隅櫓・西面の３間×17 間の多門櫓・北西隅の３間×４間の二重隅櫓という４棟分の建物の平面表示、北面多門櫓の櫓台石垣の解体修理、天守台と櫓の平面表示の間の空間の堆積土除去及び土系舗装・芝貼りなどです。

また、天守台周辺及び切手門跡の発掘調査を行い、様々な情報を得ることができました。これらの成果については、次ページ以降で詳しく紹介することにします。

史跡津山城跡保存整備事業は、今後３～４年をめどに天守曲輪全体の整備工事を完了していく予定です。

次年度以降の具体的な事業は、天守台北側の七番門虎口整備（虎口内雁木・石垣の復元、七番門跡礎石の平面表示など）・本丸と天守曲輪を仕切る「天守曲輪仕切石垣」の解体修理などです。

天守台周辺の発掘調査

平成20年度は、天守曲輪整備事業に先立ち、天守台の北・西・東の３箇所の確認調査を実施すると共に、大手側通路に位置する「切手門」跡の遺存状況を確認するための調査を実施しました（図１）。

A. 天守台周辺調査区

本年度の発掘調査は、江戸時代の生活面の高さ（江戸時代に実際に人が歩いていた高さ）を確認することを目的とし、３箇所に幅２ｍのトレンチ（試掘溝）を設定しました。トレンチ２についてはその後、幅４ｍに拡張しました。

天守台北側（トレンチ１）　江戸時代の生活面を一部確認することができましたが、明治時代の廃城時に瓦等を廃棄した穴や近代のゴミ穴により遺構面は大きく改変を受けていました。

なお、城跡とは直接の関連はありませんが、地山の高さを確認するために幅50cm程度の掘削を行ったところ、現地表より1.5～２ｍ下で、長さ40cm程度の河原石７個以上が斜めに据えられている状況を確認しました。これは河原石背後の土層の堆積状況から、古墳など墳墓の墳端の一部と考えられます（写真１・図２）。

天守台西側（トレンチ２）　表土・瓦堆積層の下から栗石の面が出土し、トレンチ西端では多門櫓の雨落溝の一部及びその下から埋没石垣２石分を確認しました。この栗石は埋没石垣の裏込めと思われますが、埋没石垣の表面から約８ｍの奥行きがあり、天守台石垣の下へと続いています。また、埋没石垣は平成11年度に南側の角が、平成19年度には北側の角が確認されていたもので、南北両角を結ぶ位置に石垣が確認できたことで、これらの埋没石垣が一連のものであることが明らかになりました（写真２）。

なお、栗石面には礎石かと思われる上面の平坦な石

写真１　トレンチ１（北西から）

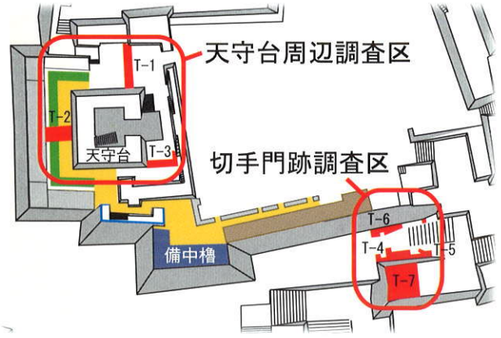


図１　調査区位置図（上が北）

写真２　トレンチ２（上が北）

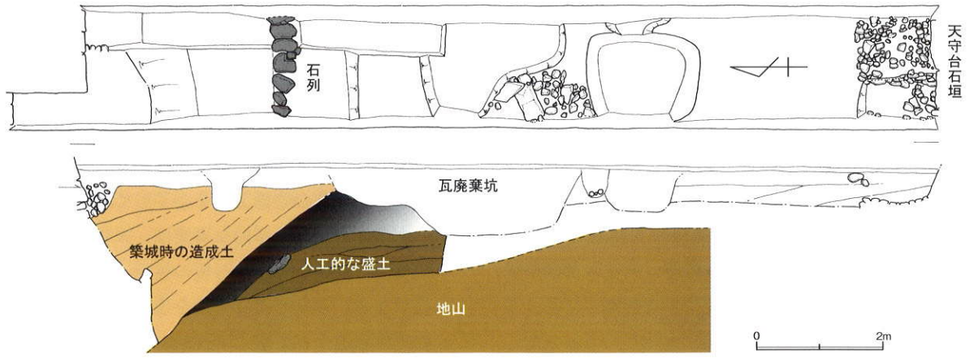


図２　トレンチ１平・断面図

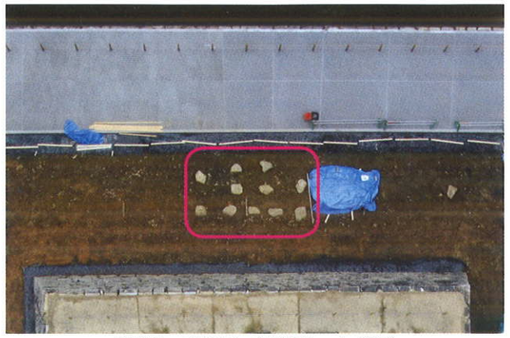


写真３　礎石？（赤線内・上が西）

５個（その後の調査で計11個確認）が存在しましたが、史料からはこの場所に建物は存在しておらず、並びも不規則であることから建物の礎石ではないと考えられます。性格は不明です（写真３）。

天守台東側（トレンチ３）　江戸時代の生活面を一部確認することができましたが、明治時代の廃城時に瓦等を廃棄した穴により遺構面は大きく改変を受けていました。

また、トレンチ１・２でも同様、天守台石垣の基底部は栗石上に直接置かれています。また、トレンチ１と同様に栗石は最下段の石の前面１ｍあまりの所まで敷き詰められていることがわかりました（写真４）。

写真４　トレンチ３（上が北）

切手門の礎石を確認しました！

B. 切手門跡調査区（トレンチ４～７）

切手門は二の丸から本丸表鉄門へ至る間の通路を仕切る大型の櫓門です。この切手門の礎石等の残り具合や背後の階段の位置などを確認するため、調査を行いました。

現在切手門跡は本丸へ通じる主要通路となっているため、中央を避け北及び南側の調査を行いました。その結果、切手門に該当する礎石群を南北両側で確認しました。また、調査区南東部で、埋没していた雁木（石段）と、切手門櫓台石垣から流れ落ちてくる雨水の集水用舛状遺

写真５　切手門跡全体写真（上が東　赤線：門跡礎石　青線：本来の石段　黒線：櫓台）